



いろいろな議論を呼ぶ中で、平成の教育改革が本格的にスタートしました。学校の完全週5日制をはじめ、授業内容の3割削減など、「生きる力」を失ったかに見える現代の子ども達を蘇らせようという取り組みの始まりです。これらの取り組みに対して多くの意見はあるのですが、本来、教育や人間育成には答えはないのですから、学校現場や社会で試行錯誤の取り組みを行い、よりよい環境を創り上げていくことしかないように思います。しかし、新たな視点として、今までと大きく異なることは、地方分権と呼ばれる社会変化の時代ですから、従来のように文部科学省が提唱して全国がそれに準じていくというやり方ではなく、地方発の果敢な挑戦が大切だと言うことです。日々子ども達に

関わっている両親やおじいちゃん、おばあちゃんが大いに発言し、また、学校現場で子ども達の変化を誰よりも実感している先生方と共に真剣に取り組んで行かなければ、子ども達の育ちの姿は変わっていくことはありません。誰かに頼るのではなく、社会全体が自らの責任として「子ども達の育ち」を考えていかなければならない時代がやってきました。

さて、最近、テレビ番組で「引きこもり」を取り上げることが多くなりました。中・高校生の不登校や引きこもりも大きな問題ですが、30歳を越えようかという大人が引きこもっている姿を見ると驚かされます。「大人の引きこもり」ですから、それを支えている家族の心中を考えると気の毒でなりません。きつと両親も高齢となり、子どもの行く末を考えると不安の多いことと思います。しかし、どこでそのようなこととなつてしまったのでしょうか。

「子ども達の遊びが集団的なものから個人的なものへと変わった」と言われ始めて久しいものがあります。幾人かの子ども達がグループをつくって遊んでいる姿は今でもよく見かけますが、年齢差を越えて大人数で遊んでいる姿はすっかり見なくなりました。「昔は」と古い話を持ち出しますと嫌う傾向もありますが、昔は子ども達の数も多かったせいか、地域の中に年齢差を越えた集団が数多くありました。その中では、大人には見えないルールや決まり事がある、知らず知らずのうちに守らなければならぬことを学びました。また、実際にいじめられたり、いじめたりと今では騒ぎになってしまふようなことも、子どもだけの社会の中で学習することが出来ました。ですから、いじめの問題にしても、大人から「いじめることはいけないこと」と教えられる

ことがなくても、自分がいじめられて嫌な思いをすることで、友達をいじめてはいけないことを身につけていきました。自分が体験を持つて身につけたことですから、これに勝る教育はありません。

現在は、子ども達の数が極端に減つてしまつて、集団を用意してあげなければ遊んだり出来ない社会になってしまいました。大変悲しいことですが、このままでは前述の「大人の引きこもり」も益々多くなることでしょう。

生きる力を失つた大人達が増えだしてから社会が問題提起しても遅すぎます。子育てや教育の問題をそれに関わっている若い世代や教育現場の先生達だけの課題とするのではなく、地域全体、国全体の将来に関わる大きな課題として取り組み姿勢が今、求められています。

ノーベル賞を受賞した白川教授は「科学を学ぶ上での基本は、よく観察すること、ありのままを観ることであり、この基本は少年時代、飛驒の野山を駆けめぐつて自然に身に付いたものである」とインタビューに答えておられます。我々の地域、都留市内を見渡すと実にすばらしい自然環境に恵まれています。昔は子ども達がこのすばらしい自然の中で毎日伸び伸びと遊び回っていました。子ども達の「生きる力」を考えるヒントが、このすばらしい自然の中にあるような気がします。

# 伝言板

富士北麓・東部地域振興局健康福祉部(大月保健所)

子どもに使える医療給付

### ★養育医療

出生体重が2000グラム以下で、病院での治療を必要とする未熟児に、入院中の医療費が給付されます。

### ★育成医療

十八歳未満で、肢体・視聴覚・音声・言語そしやく機能・内臓のいずれかに疾患や障害があり、放置すると将来障害が残ると認められる場合に必要医療費が給付されます。

### ★小児慢性特定疾患治療研究事業

十八歳未満で、悪性新生物・慢性腎疾患・喘息・慢性心疾患内分泌疾患・膠原病・糖尿病・先天性代謝異常・血友病等血液疾患・神経筋疾患で長期に治療が必要な場合に、必要な医療費が提供されます。

また、慢性腎疾患・喘息・慢性心疾患・膠原病・神経筋疾患は、一カ月未満の短期入院も対象になります。

### ★受給手続・問合せ

健康福祉部  
☎(22)7827

『薬物乱用防止普及運動』

覚せい剤やシンナーなどの薬物を、好奇心や一回なら良いだろうといった軽い気持ちで使うと、精神や身体に障害をおよぼし一生を棒に振ってしまいます。

通常の生活にすぐ戻りたくても戻れません。このような薬物の使用を根絶しなければなりません。

大月保健所管内においては四十四名の市民の方々が山梨県知事の委嘱を受け、薬物乱用防止指導員として地域に根ざした活動を行っています。

今年も六月二十二日(土)に、「ダメ。ゼッタイ。」をキャッチフレーズとして、ヤング街頭キャンペーンを行います。

これは、全世界の国々が一丸となって、薬物乱用撲滅運動を展開し、一人ひとりが知らない遠い世界のこととしてではなく、本当の恐ろしさ怖さを正しく知ってもらうために普及運動の一環として、市町村、学校関係の協力も得て行うものです。

問合せ 健康福祉部  
☎(22)7827